

第一章 宮島の歴史・史跡

巖島（宮島）のはじまり



巖島神社大鳥居

浪静かな瀬戸内海の島、
巖島は約6000年前に対岸
と分離して島になったとい
われている。全島が花崗岩
からなる周囲約30kmの海
岸は、弥山（535m）や岩
船岳（466.6m）などの
谷間から流れ出る川が
扇状地をつくり、海流に
よって運ばれてくる砂に

よって砂浜ができた。また、山中からは大きな岩塊が崩落して海岸部に堆積し、さらに岬の先端部などの海岸は打ち寄せる波風により海食をうけ海食崖となり、節理に沿って海食洞ができ、変化に富んだ自然地形を呈した島になっていった。

多々良瀨などの沖積台地や数カ所の海岸からは、石器や縄文・弥生時代の土器が出土し、貝塚跡も存在している。照葉樹林に覆われた島で小規模ながら人々が暮らしていたと考えられている。

自然現象に大きく左右される自然採取や農耕生活を営んでいた広島湾西部沿岸の人たちは、弥山を主峰とし急峻な山塊の島の姿に人知でははかり知れない力・靈威を感じ、島全体を自然崇拝の対象とした。また、対岸を望む紅葉谷川や白糸川・大元川の河口に開



駒ヶ林あたり

けた砂浜は、弥山を選択するための場所となっていたといわれている。

巖島神の鎮座は、推古天皇元（593）年とされ、国家体制が次第に整い瀬戸内海が畿内と北九州を結ぶ交通路として重要性を増す時期にあたり、海洋神としての性格も併せもつ神として広く信仰されるようになった。

●平安時代の厳島（宮島）

対岸「佐伯郡」^{さえきぐん} 一帯は、700年代には安芸と周防の国境が大竹河（現在の小瀬川）^{おげがわ} に定まり、郡司が設置され農耕社会としての形を整えていった。

厳島が歴史書に記されるのは、『日本後紀』^{にほんこうき}（840年成立）^{こうにん} 弘仁2（811）年の項に「安芸国佐伯郡速谷神、伊都岐嶋神」とあるのが最初で、佐伯郡内に速谷・伊都岐嶋の神社があり、この伊都岐嶋神が現在の厳島神社とされている。さらに「伊都岐嶋中子天神」「伊都岐嶋方小専神」（『三代実録』^{さんだいじつろく}）との記述があり、800年代後半にそれぞれ鎮座地は不明であるが、厳島神社周辺および海岸部にはいくつかの神社が存在し、島が伊都岐嶋と呼ばれていた。

そして、厳島神社は『延喜式』^{えんぎしき}（927年成立）に速谷神社（現在の速谷神社）・安芸郡多家神社（現在の多家神社）とともに「名神大」と位置づけられ、安芸国を代表する神社のひとつとなり、天慶3（940）年藤原純友の乱には追捕祈願が行われるなど、神の鎮座する島として他地域には見られない特異な歴史をたどることとなった。

厳島が一躍その名を知られるようになるのは、1100年代後半の平清盛^{たいらのきよもり}を始めとする平氏一族の厳島信仰からである。

平清盛^{たいらのきよもり}は久安2（1146）年から保元元（1156）年まで安芸守になり、佐伯郡の豪族佐伯一族と結びつきを強めていった。清盛の最初の厳島参詣^{さんげい}は永暦元（1160）年とされ、以後治承4（1180）年まで記録に残っているものだけでも10回も社参をしている。さらに長寛2（1164）年には法華経^{ほけきょう}を書写して奉納し（国宝「平家納経」^{へいけのうきょう}）、山県郡志道原荘（現在の北広島町志路原）^{しじはら}を寄進するなど、厳島社への尊崇^{そんすう}ぶりがうかがわれる。

仁安3（1168）年神主佐伯景弘^{さへきかげひろ}は、本宮（厳島）37宇・外宮（対岸の地御前）19宇の堂社殿を造営し、現在見られるような廻廊で結ばれた海上社殿が完成した。後白河法皇^{ごしらかわほうおう}・建春門院^{けんしゅんもんいん}の参詣（1174年）、また清盛ら平氏一族は社殿・廻廊内で盛大な千僧供養^{せんそうくよう}を催し、舞楽^{まがく}が演じられる（1177年）など一気に都の文化が开花し、貴族たちの社参が相次ぐようになった。こうして、厳島神社は安芸国の有力神社としてばかりでなく、石清水・賀茂・春日社などと同格の22社に加えようと発議される（1179年）など、我が国の大社としての特性を強めて

いった。さらに弘法大師^{こうぼうだいし}開基伝承のある弥山には平宗盛^{たいらのむねもり}によって「弥山水精寺」^{めいほんしやう}銘のある梵鐘^{ぼんしやう}が寄進されるなど仏教的要素を加えて神仏習合が進んでいった。

●鎌倉時代以降の厳島

寿永3（1185）年の壇之浦の合戦後、神主佐伯景弘^{さへきかげひろ}は源頼朝^{みなもとのよりとも}から長門国での宝剣探索の命を受け、また厳島社では藤原泰衡^{ふじわらのやすひら}追討が祈祷されるなど、厳島神社は平氏滅亡後も大きく変わることはなかった。承久3（1221）年、承久の乱で朝廷や公家勢力を弱体化させた鎌倉幕府は、各地にあらたな地頭を配置するなどその権力を強化し、草創以来の神主佐伯氏に代わって関東御家人の周防前司^{しゅうぼうぜんし}藤原親実^{ふじわらのちかざね}を厳島社神主として任じた。

厳島神社の社殿は、承元元（1207）年と貞応2（1223）年火災にあうが、それぞれ再建された。2度目の再建にあたり嘉禎元（1235）年には、その完成を急がせるために安芸国が8年間造営料とされ、神主藤原親実が安芸国の守護となった。藤原神主家は、安芸一宮としての地位を確立し、安芸国西部全域にわたり神領として寄進された広大な荘園を経済的基盤にして、対岸の桜尾（現在の廿日市市桜尾）^{さくらお}を拠点にして安芸国屈指の勢力になっていった。

人々の厳島社への信仰はますます篤くなり、元寇に際しては異国降伏の祈禱が行われた（1293年）。一遍^{いっぺん}や二条尼^{にじょうあま}などの参詣、さらに各地から華厳経^{けこんぎょう}などの写経が奉納され、また足利尊氏^{あしかがたかうじ}や大内義弘^{おうちよしひろ}は造営料を寄進し、さらに博多の商人からは釣灯笼^{つりどうろう}、堺の商人からは絵馬「三十六歌仙之図」^{えま}が奉納された。

平安末期、島内には神に奉仕する内侍（巫女）^{ないし}が居住するのみで、その他祭祀に仕える社家や供僧は対岸の外宮のある地御前周辺に居住していたが、参詣人や商人たちが多数集まるようになると、1300年代には島内に居を移すようになった。滝町などの山麓には寺院が建ち並び、神社周辺には民家が並ぶ町が形成されはじめた。祭礼・法会に参集する参詣者^{にぎ}で賑わいを見せるようになり交易・



桜と五重塔

商業都市、瀬戸内海の海上交通の要衝をなす港湾都市の性格を加え、神聖な島の俗化を進めることとなった。

●戦国時代の厳島

神主家は将軍家や隣国の守護大名大内氏の勢力下で神領の維持に努めていたが、永正5（1508）年大内義興とともに上京していた神主興親が京都で病没し、藤原神主家は断絶した。これ以後神領衆（神領の管理にあっていた武将）は神主の後継をめぐる対岸佐伯郡内を舞台に安芸国守護武田氏と大内氏をそれぞれ後楯として東西に分かれて対立した。この間に厳島に在島して祭祀を司る社家は有力な武将の御師となり、法会を執行する供僧や社殿の造営にあたる大願寺とともに、大内氏の庇護のもとで社殿の修造や祭礼の復興、さらに多宝塔（1523年）を建立するなど、次第に島内支配権を強めていった。

また、島内各所で寺院が再興され、交易に従事する商家が軒を連ねる町が形成された。神社や大願寺など寺院の周辺には滝町・中西町・大西町ができ、その後も急速に町域を拡大し、広域活動を行う商人たちにより自治的に町を運営する自由都市の雰囲気をもつ島になっていった。

弘治元（1555）年大内氏を急襲した陶晴賢と安芸吉田（現在の安芸高田市）を本拠地とする毛利元就が戦った。この厳島合戦では、陶軍は塔の岡に、毛利軍は宮ノ尾城（要害山）にそれぞれ布陣していたが、包ヶ浦に上陸した毛利軍の奇襲により、神社裏や滝町・大元浦で激戦が行われた。戦闘は1日で終結し、陶軍は駒ヶ林、大江浦、青海苔浦へと敗走した。

合戦後、毛利氏の御師を務めていた棚守房頭は、社家総奉行として神事祭礼の復興をはかる。御手洗川が背後に流れる現在の厳島神社の社殿は元亀2（1571）年に遷宮された。毛利氏の領国拡大とともに社領の寄進も相次ぎ、現在の廿日市市を中心に広島湾西部一



帯、約5300石が社家・供僧・内侍の給田、神事田、造営料となっていた。また、能や連歌の興行が行われ、あらたな文化が導入された。

●江戸時代以後の宮島

慶長5（1600）年毛利輝元に代わって広島に移ってきた福島正則は、祭礼の勤行、廻船、商業の保護など従来の政策を継承したが、社領はすべて没収し、新たに祭料や社家の扶持米1350石を蔵米から支給し、造営料は別途支出することとした。さらに元和5（1619）年に広島藩主となった浅野長晟は、祭料・扶持米などを1090石とした。こうして厳島社の領主権は喪失し、厳島神社は、社家を代表する棚守、供僧を統括する座主（大聖院）、造営にあたる大願寺の三者により経営される江戸時代の体制ができた。

一方、寛永12（1635）年には、宮島奉行所が設置され、城下町広島と同様に藩の年寄に直属する町奉行により町方支配が行われるようになった。そして、町役人には、港関係の入津頭取・入津算用役・唐物改役など、山林・富くじ関係の山守頭取・木守役・入札場所元締役などがいた。

祭礼市は春・夏・秋の三季に催され、近在の瀬戸内沿岸のみならず京都・堺・九州など遠方からも商人が集まり、虎革・白砂糖などの外国貿易品なども商われていた。桃花祭・管絃祭・菊花祭はこの祭礼を継承するもので、神社では能や舞楽が演じられている。とくに雅楽が演奏される御座船が対岸地御前神社まで渡御する管絃祭には、装飾を凝らした参詣船が多数集まり、我が国を代表する海上の祭りとして広く知られていった。

また藩は厳島の商業・交易活動の促進を図るために、寛永2（1625）年広島城下材木町の娼家を島に移転させ、祭礼時には芝居や富くじの興行が行われ、常設の芝居小屋も設けられるなど近世文化の拠点・遊興の地としての性格を強くしていった。こうした賑わいのある島の様子は厳島図屏風などに描かれている。

そして、『日本国事跡考』に、安芸厳島は陸奥松島・丹後天橋立と並んで「三処之奇観」と記され、1600年代の末には「日本三景」として称揚され、厳島神社の由来や年中行事を紹介した名所案内記『厳島道芝記』が出版された（1702年）。

さらに、正徳5（1715）年には光明院の僧恕信らによって「厳島八景」が

選定され島内の四季折々の景色が詩歌などに読まれるようになり、また弥山めぐりと称して弥山山頂に点在する諸堂に詣で、弘法大師の伝説を訪ねる人たちも増え、景勝地として広く知れ渡るようになった。

山林は藩の管理下におかれ、材木の切り出しや薪が特産物となっていたが、参詣者の増加に伴い土産物として杓子や盆・色楊枝などの木工品、穴子・鮑などの海産物が販売されるようになった。現代にも受け継がれている杓子は、光明院で修行していた誓真が考案し、その製法を町民に教えたと伝えられている。

●明治時代以降の厳島

明治元(1868)年の神仏判然令に始まる神仏分離政策は、長い伝統をもつ神仏習合の厳島に大きな変化をもたらした。

厳島神社の本地仏十一面観音を祀っていた本地堂(観音堂)や鐘楼・経蔵は破却され、十一面観音は大聖院に、五重塔や大経堂(現豊国神社)の本尊は大願寺に移され、仏教的な様相を一掃し、国幣中社として位置づけられた。また、座主以下の供僧の務めていた経会などは廃止され、経済的な基盤を失った供僧寺院はほとんどが廃寺となった。

一方殷賑をきわめた遊郭は退転し、富くじ興行も禁止され、町は大きな転換を迫られるなか、豊国神社(千畳閣)で博覧会が開催され各地の産物が出品され(明治5年)、厳島神社の周辺地域が厳島公園となり(明治7年)、新たな観光地への模索が始まるとともに、包ヶ浦や杉之浦などはあらたに農作地として開墾されるようになった。

第1回内国勲業博覧会(明治10年)に彫刻など宮島細工が出品され、物産組合が作られ(明治20年)杓子や盆などの木工品の生産が本格化していった。広島の外港として広島に出入りする人や物資の中継機能を果たすようになり、山麓の寺院跡地や紅葉谷・大元浦には旅館が新設され、物産卸・小売店などが増えていった。関西と下関を結ぶ中国航路の厳島への定期寄港の開始(明治26年)、山陽鉄道宮島駅(現JR宮島口駅)の開業(明治30年)と厳島・宮島間の定期航路開設により、さらに島への利便性は向上し各地からの来訪者が増加していった。

日清戦争に際しては、広島から大陸に向かう将兵は厳島神社で戦勝祈願を行って戦場に出発し、また帰還報告に宮島を訪れ杓子を土産に買って帰り、宮島杓子

は全国に広く知られるようになった。また豊国神社(千畳閣)や大願寺・光明院などは広島予備病院転地療養所になり戦傷者を収容していた。さらに海軍鎮守府のある呉と旧陸軍第5師団司令部のある広島への海からの入口となる厳島と能美島の海峡・厳島海峡に面する鷹巣浦、厳島と対岸大野の海峡・大野瀬戸を望む室浜には、広島湾を防御するために砲台が設置され(明治30年代)、広島湾要塞の重要な拠点となり、周辺の海上では射撃演習などが行われ、島内の風景写真の撮影や施設内への立入りが制限されるようになった。

また、岡倉天心などによって厳島神社や大願寺などの宝物や仏像などが調査され、古社寺保存法(明治30年)が制定されるとすぐに厳島神社の「平家納経」が国宝に指定され、引き続いて厳島神社本社・大鳥居を始め五重塔・多宝塔など厳島神社の主要な建物が特別保護建造物に指定された。そして、それぞれの建物は綿密な調査をもとにして、創建時の姿に復元する工事(厳島神社明治・大正大修理工事)が始まり、明治初期に改造されていた本社の千木や勝男木などが取除かれ、社殿や廻廊に掲げられていた奉納絵馬も豊国神社(千畳閣)へ移された。その後、刀剣・甲冑・舞楽面・能装束、また大願寺や光明院の仏像などが、美術工芸品として高く評価され相次いで国宝になっていった。こうした宝物や建物などの保全を図るために厳島神社保存会(後に厳島保勝会と改称)を設立し、建設が中止していた石の大鳥居が完成するなど、宮島は文化財の宝庫といわれるようになっていった。

一方、地域振興策の一環として、厳島公園改良のため市街地周辺の地形・道路や植生の調査と公園設計も行われた。春の梅・桜・ツツジの花、初夏の新緑、秋



千畳閣に掲げられている絵馬

の紅葉など四季を通して楽しめる樹木、諸処に散在する社寺、眺望のいい場所を散策できる回遊道路の整備、風致景観を重視したベンチや東屋の設置、樹木の植栽、水族館の設置などが盛り込まれ、さらに国鉄宮島駅（現宮島口駅）周辺の整備なども考えられていた。こうした設計案は、造園の大家といわれた本多静六ほんだ せいりくによってまとめられ、大正期に改良工事が行われた。

浜之町の沖合に埋立て商船棧橋しょうせんさんばしが設けられ、厳島棧橋から豊国神社（千畳閣）下までが県道となり商店街が整っていった。そして、大元浦から多宝塔・大聖院・藤の棚・紅葉谷に至る公園道が造成された。また弥山登山道の改修、杉之浦海水浴場の開設、大元浦にはヤン・レツルの設計による宮島ホテルの新館が完成（大正6年）し、外国人観光客にも楽しめる観光地としての整備が進められた。

また、我が国初の自然保護を目的とした法ともいべき史蹟名勝天然記念物保存法ができると、厳島は自然の地形が大きく変貌していないこと、さらに平氏一門の度重なる厳島神社への参詣、厳島合戦の古戦場、景勝地日本三景のひとつ、などにより全島が史蹟・名勝「厳島」に指定された（大正12年）。さらに、厳島神社の後背地の弥山の北麓ほくらく一体は、人の居住地の近くにありながら自然植生をそのまま伝えているとして、天然記念物「瀨山原始林みせんげんしりん」に指定され（昭和4年）、その地形・植生・景観の改変が厳しく規制されることになった。

昭和20（1945）年9月枕崎台風の襲来による紅葉谷川の土石流どせきりゅう発生により、土砂が厳島神社境内に流れ込み、社殿や廻廊に大きな被害をもたらした。その時の流出土砂は運び出されて大元浦沖が埋立てられ、西の松原の築き出しが行われた。厳島神社の社殿の復旧がはかられ（厳島神社昭和修理）、また紅葉谷は自然景観に配慮した庭園砂防工事により復旧し、紅葉谷公園として整備が進められた。

さらに、瀬戸内海国立公園への編入、紅葉谷と獅子岩を結ぶロープウェーや宮島水族館が営業を開始し、大元浦や神社沖では海水浴客で賑わい、多くの人たちが楽しめる行楽地となっていった。

平成8（1996）年には、広島市の「原爆ドーム」とともに「厳島神社」が世界遺産条約に基づく世界文化遺産に登録された。海上社殿をはじめ前面の海や背後の弥山の背面まで広範囲にわたるその区域は、人類共通の文化遺産として後世に継承されることとなった。

中世の史跡

平安末期以来、厳島参詣いつくしまさんげいが頻繁ひんぱんになるにつれ、島内ではそれぞれ参詣者にちなんだ伝説が生まれ、各所に伝説の地が伝えられている。著名な僧侶、武将などにまつわるもの、とりわけ厳島合戦に由来するものが多い。厳島を訪れた人たちは、島での印象を記録として書き残し、さらにこうした記録が参詣の動機となって旅へと誘っていた。とくに江戸時代になると旅が一般化し、各地の名所記や案内記、厳島では「厳島道芝記」「芸州厳島図会」などが多数刊行され、建物や器物、動植物や自然現象にいたるまでさまざまな内容が記されている。必ずしも歴史的事実として確かめられるものばかりではないが、当時の人たちの考え方を知ることができるものであり、また物語性のある歴史解釈として、文学的想像力を楽しむことができるものである。

●経の尾(きょうのお)〔清盛塚〕

宮島歴史民俗資料館から水族館に向かう道の高い岡の上に石塔たいらのきよもりが建っている。平清盛が一字一石ほけきょうの法華経を刻んで納めたと伝えられ、清盛塚きよもりづかという。そしてこの尾根一帯を「経の尾」と呼んでいる。平安時代には「西崎」とも記され、厳島千僧供養いつくしませんそうくようの時にはこの尾根の先端から、豊国神社のある「宮崎」まで海上に棚を設けて松明たいまつを掲げて点灯したと記されている。



清盛塚（経塚）

●御幸石（みゆきいし）

滝宮神社たきのみやじんじやに登る石段の左側にある巨大な平たい石。高倉上皇たかくらじょうこう厳島御幸の時、この上に御輿みこしを据え、白糸の滝を御覧になったといわれている。

●塔の岡（とうのおか）

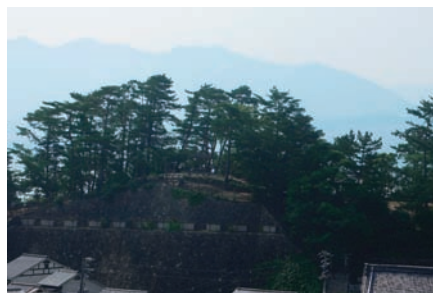
平安時代には「宮崎」と記され、その後五重塔が建立されてからは塔の岡と呼ばれている。眼下に厳島神社を望むこの地は、社殿を風波から防御する重要な役割を果たし、頂きには納経堂や五重塔などが建てられた。厳島合戦時、陶方の軍勢は多宝塔からここに本陣を移し、北方の宮ノ尾の毛利方の陣と対峙した。現在は豊国神社の社殿が建っているが、この岡を境にして厳島神社側の市街地を西町、表参道の市街地を東町と呼んでいる。

●宮ノ尾城跡(みやのおじょうあと) [要害山]

栈橋から出て目の前に続く低い山が、要害山である。

ここに数年前まで大きな「二位殿灯籠」という灯籠があった。この灯籠は、二位の尼（平清盛の妻時子）が、寿永4（1185）年壇の浦の戦いで安徳天皇と共に入水し、その亡骸が有の浦に流れ着いたということで建てられた灯籠で、大正年間にはもう少し先の商船栈橋の側の海岸に立っていたが、現在この灯籠は、石大鳥居の近くに立っている。要害山という呼び名は、弘治元（1555）年、厳島合戦の時に毛利方の陣、宮ノ尾城が置かれたことから名付けられた。この一連の尾根は「宮尾」とも称され、前面の海上、大野瀬戸を航行する船を一望できる眺望の良いところである。

室町時代から戦国時代にかけて広島県の沿岸部の小高い丘には、行き来する船を監視するために砦のような施設が数多く設けられていた。それを水軍城という。宮ノ尾城もこうした砦の一つであったと考えられている。当時の瀬戸内海航路は潮流が激しく、しかも多くの島々の間をぬうように航行していたため、その操船には地形・海況・気象などを熟知していなければならなかったのである。沿岸の人々は、水先案内料を取って、安全な



宮ノ尾城跡（要害山）

航行ができるように水先案内をしていたのである。こうした案内の拠点が水軍城だった。特に、ここ宮島から現在の因島までの区域は地形が複雑であったことから、後に「村上水軍」と呼ばれる統一された水軍集団が生まれた。

この要害山の上からは、落ち着いた色の瓦が続く宮島の家並、塔の岡、大聖院、弥山が望め、急峻な山裾と海岸の間に形成された町の様子が眺望できる場所である。

●包ヶ浦（つつみがうら）

毛利元就と陶晴賢が戦った厳島合戦で、大軍を率いていた陶軍に対して毛利軍は数において劣り、正面から戦いを挑んでは到底勝ち目のない状況であった。そこで元就は奇襲作戦をとった。弘治元年9月晦日の夜、元就は地御前火立岩より出陣を命じ



包ヶ浦

た。このとき暴風雨であったが、元就は敵に知られず上陸を図るのに暴風雨はむしろ好機であると考え、渡海を決行。やがて風雨も凪ぎ、ひそかに包ヶ浦に上陸した。

●博奕尾（ばくちお）

包ヶ浦の背後にそびえる尾根の頂き。包ヶ浦に上陸した毛利軍は、その夜のうちに険しい山道を登り兵を進め、陶軍の本陣「塔の岡」を見下ろすこの地に陣を布いた。元就は傍の兵にこの地の名を尋ね、「博奕尾」であると聞くと、「博奕もうつもの、この戦はもはやわれらが勝利ぞ！」と兵の士気を鼓舞したという。10月1日夜明けとともに毛利軍は攻撃を開始。毛利軍の本隊は博奕尾から陶軍の背後へ一気に攻め下りた。陶軍は毛利軍の奇襲に大混乱となり全軍総崩れとなった。海上では毛利軍に加勢した村上水軍が活躍し、陶方の船を攻撃、海への逃げ道をふさいだ。こうして陶軍は壊滅状態となり、この戦いは毛利軍の圧勝で終わった。

●高安ヶ原（たかやすがはら）

青海苔浦あおのりうらから山中に入ったところ。巖島合戦に敗れた陶晴賢すえはるかたは青海苔浦まで逃れ、島からの脱出を図ったが船が見つからず、青海苔川沿いを川上に引き返し、ここで自刃じじんしたと伝えられている。（ここに「陶晴賢敗死碑」が建っている）

●滝小路（たきしょうじ）

巖島神社のすぐ南側にあたり、滝小路すじは筋違橋かいはしを渡って大聖院に至る滝町の通りをいう。巖島合戦の時、毛利軍の奇襲を受けて総崩れとなった陶軍であったが、そのなかで陶軍の勇将ひろなみかわけの弘中三河守父子は滝小路に踏みとどまり、追撃してきた吉川元春きっかわもとの軍勢と戦った。しかし危うくなった弘中三河守父子は滝小路一帯に火をかけ、それに紛まぎれて退いていった。これを追撃しようとした元春であったが、巖島神社に火がかかる心配があったので、「敵を逃すとも苦しからず、神社社殿を焼かすな」と命じ、すぐに消火作業にあたらせたといわれている。



滝小路

また、この辺りは神職の屋敷や寺院が建並び、早くから町が形成されたところである。

●柳小路（やなぎしょうじ）

中江町ちゅうえまちの通りをいう。弘治元こうじ（1555）年の巖島合戦では混乱のなか、陶方の軍勢がこの柳小路から毛利軍へ攻め掛かった場所である。かつての古戦場も今は古い町並を留める静かな通りになり、春の桜や秋の紅葉などを楽しみに多くの人たちが足を運ぶ所となっている。

●金岡水（きんこうすい）

杉之浦にあり海の近くであるにもかかわらず、水が絶えることがないといわれている。15世紀に対岸廿日市の洞雲寺とううんじを開いた金岡用兼大和尚きんこうようけんが、ここで座禅をすると湧き出たという伝説があり、その水脈は洞雲寺とううんじの金岡水きんこうすいとつながっているといわれている。なお、洞雲寺とううんじには巖島合戦で敗死した陶晴賢すえはるかたの墓がある。

●白糸の滝（しらいとのたき）

滝宮神社のすぐ側にあり、白糸が乱れて流れ落ちるように見えることから「白糸の滝」と呼ばれていた。高倉上たかくらじょうこう皇に同道した公顕僧正はこの滝を

雲より 落ちくるたきの白糸に
ちきりをむすぶ ことぞうれしき

と詠んだと『高倉院巖島御幸記』たかくらいんいつくしまごこうきに記されている。



白糸の滝

近世の史跡

戦国時代になると、厳島神社や大聖院をはじめとする寺院の周辺に祭礼行事を行う人たちの住まいや参詣客をもてなすための店ができていたが、江戸時代になると有の浦の沿岸にも家々が並び、町が形成された。五重塔のある塔の岡を境にして、西方神社側を西町といい、^{おおまち}大町・^{たきまち}滝町・^{ちゅうえまち}中江町・^{なかにしちょう}中西町・^{おおにしちょう}大西町などが、東方宮島棧橋側には、^{ごおうまえちょう}牛王前町・^{なかのちょう}中之町・^{うおの たなちょう}魚之棚町・^{きたの ちょう}北之町・^{はまの ちょう}浜之町・^{いせまち}伊勢町など東町と総称される町ができ上がった。西町は神社裏から大聖院や大元神社などの寺社に通じる街路を中心に神職や祭礼に従事する人たちが住んでいた。また東町は^{あり うら}有の浦の海岸に沿って湾曲した通りの両側に商業を営む人たちが多く住む町となっていた。

各町は通りの両側が一つの町とされ、それぞれの町には^{まちどしより}町年寄が任じられ、町の神社の祭りや寺院の^{ほうえ}法会には町中が携わり、それぞれ独自性をもっていた。各家は通りに面して^{こうし}格子が設けられ、みせ・おうえ・ざしきと呼ぶ3間続きの間取りで、間口が狭く奥行きが深い造りになっていた。

大元川・紅葉谷川など流れ出る川水を生活用水とし、神社裏や大西町にはこうした取水場が設けられていたが、後には各所に井戸が掘られた。

こうした町が商いや祭礼に集まる多くの人たちを迎え、正月や盆などには表に^{まんまく}幔幕を張り、^{たんご}節分や端午の節句には軒先にたわらうい（厄よけのヒイラギとタラの小枝）や^{しょうぶ}菖蒲の葉を掲げ、四季折々の風情を織りなしていた。

●石風呂跡（いしぶろあと）

水族館前の道路を隔てたところに石風呂跡がある。弥山^{くもんじ}で求聞持の修行をする者が^{らんき}嵐気に悩むのを救うために^{こうぼうだいし}弘法大師が造ったという一種の蒸風呂。これに入る者は綿入れの着物と膝かけの衣をつけ、^{かせづえ}架杖を持って腰掛ける。眼病・頭痛が治るなどの効能があるといわれ、石風呂を目当てに遠方からも保養に来る人が絶えなかったといわれる。

●宮島奉行所跡（みやじまぶぎょうしょあと）

市役所宮島支所のあったところには宮島奉行所があった。広島藩は、^{かんえい}寛永12（1635）年宮島奉行を任命し、奉行所を設置して明治維新まで町方として支配していた。



宮島奉行所跡

●西松原（にしのみつばら）



西松原

西松原は、江戸時代初期までは存在しておらず、西廻廊の出口にある大願寺付近は^{さす}砂洲になり、熊^{くま}毛の洲と呼ばれていたといわれている。

^{てんぶん}天文10（1541）年、厳島神社の各社殿は紅葉谷川の土石流で壊滅的な被害を受けた。その後紅葉

谷川の水が社殿に流れ込むのを防ぐため、流出した土砂で堤防を築いて流路を変えて現在の^{みたらい}御手洗川ができた。

江戸時代以降、こうした^{どせきりゅう}土石流で流出した土砂や浜に堆積した砂で、御手洗川の河口に堤防を築出してそこに松を植え、西松原が徐々にできあがっていった。

^{かんぼう}寛保3（1743）年には、広島城下の商人4人によって新たに50丈（約150m）におよぶ堤防が築出され、108基の石灯籠が立てられ現在の松原の原形が作られた。光明院の^{げんじん}恕信によってこの経緯を記した大燈籠が立っている。神社周辺に堆積した海砂と、^{げんぶん}元文元（1736）年の御手洗川の土石流の残土処理とを併せて造^{てんめい}成されたものと考えられている。その後、天明年間にも延長されている。

昭和20(1945)年の枕崎台風におきた土石流の残土は、大元浦沖(現在の水族館の地)の埋め立てと、この松原の伸長に使われた。先端近くに明治31(1898)年にハワイ・ヒロ在住の鈴木国蔵の寄進した石灯籠が、また御手洗川を渡る橋の傍らには岩谷一六の書による明治34(1901)年に造立された注連柱が立っている。

神社の西方にあるこの松原は、海上から巖島神社を見る時ちょうど町並みを隠し、巖島神社周辺の景色をより一層神秘的にする役割を果たしている。日没になると立ち並ぶ石灯籠が点灯され、社殿とともに幻想的な夜景を楽しむことができる。

●誓真釣井(せいしんつうい)

江戸時代の島民の生活に重要な影響を与えたのが僧誓真である。

当時、巖島神社や寺院の参詣者へこれといったみやげ物がなかったため、誓真は島民に木工品作りを教え始めた。こうして作られた器物は旅の人に喜ばれて飛ぶように売れ、やがて杓子づくりが始まったのである。また、杓子の形は日本



港町に残る誓真釣井

本三大弁財天のひとつ「巖島弁財天」の持物琵琶をかたどったもので「宮島しゃもじ」として、また“敵をメシ取る”“幸福をすくい取る”縁起ものとして、杓子の製造販売が宮島を代表する産業となっていった。また誓真は修行のかたわら、道路や水路を改修し、島民の生活用水のために井戸を掘った。10ヶ所の内、現在4ヶ所が残っており、“誓真釣井”として島内の人びとに親しまれている。

・港町…井桁には「寛政2(1790)年5月」の刻銘がある。この井戸の側に誓真地蔵が祀っており、毎年8月24日、この前で地蔵さん祭りが行なわれている。

・西連町…井桁には「寛政7(1795)年3月」の刻銘がある。

・魚の棚町…井桁には「天明7(1787)年11月」の刻銘がある。

・幸町…この井桁石には「天明4(1784)年」刻銘がある。

●仁王門跡(におうもんあと)



仁王門跡

要害山に続く尾根筋のちょうど宮島棧橋すぐ前あたりにある。長浜に通じる道があり、江戸時代にはここに仁王門があったが、明治維新の際に取り壊され、力士像は大願寺の仁王門に移されたといわれている。要害山は巖島神社の鬼門(艮・東北の方角)にあたる。

ここからは弥山や東町の家並が一望でき、周辺は桜の名所となっている。

●聖崎灯台(ひじりざきとうだい)

島の北端、蓬莱岩のすぐ近くの海上に立っている石灯籠。この周辺は浅瀬となっており、船の航行には危険であるため、天保15(1844)年にこの灯籠が設置され、対岸地御前の人によって毎夜点灯されていた。現在は、外形はそのままに太陽発電により点灯されている。



聖崎灯台

●棚守屋敷跡(たなもりやしきあと)

滝町にある巖島神社を代表する神職、棚守の屋敷跡で、藩主が参詣した時などには宿所となっていた。屋敷内には能舞台も設けられ、連歌の会も興行されるなど、賓客を迎える場となっていた。

ここから大聖院にかけては、神職や供僧の寺院が建ち並んでいたが、殆どの寺院は明治初期に退転し、今は石垣のみが往時を偲ばせている。



棚守屋敷跡

●大東富くじ場跡（だいそくとみくじばあと）

徳寿寺とくじゆじの前、西連町にあり、ここに富籤とみくじの抽選会場になっていた建物があった。宮島の富籤は、宮島の特産物「大東」の入札形式をとって興行され、大東支配所と呼ばれていた。抽籤は大きな箱に番号を記入した木札を入れ、箱を回転させ、側面の穴から錐を入れて木札を突き刺し、当籤番号を決めていた。当り札には「大東〇〇束」と記され、富札は瀬戸内海全域に渡って売捌うりさばかれていた。

大東は燃料として使用される薪のことで、島の山林から伐り出して販売し、その収益は運上金として藩に収納していた。



大東富くじ場跡



富札（合鑑）



富くじの木札

●浜役所跡（はまやくしょあと）

浜之町、要害山の麓にあった役所。主に宮島に出入りする船舶を管理する役所で、後には粉板そぎいたを作る粉場そぎばや荷物を収納する倉庫なども設けられていた。

●宮島遊郭跡（みやじまゆうかくあと）

宮島は江戸時代に広島藩が城下の娼婦を島に移転させ、遊郭のあった場所である。棧橋に通じるトンネルの入口あたりに大門があったといわれている。

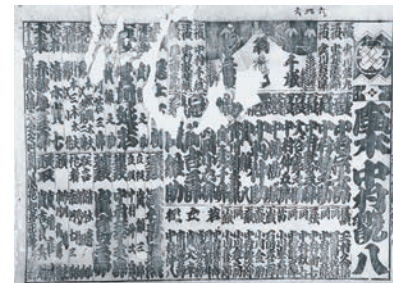
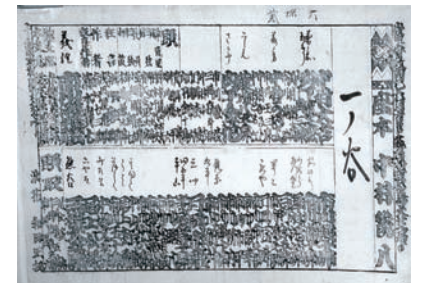
江戸中期の全国遊郭番付には、前頭3枚目にランクされるなど広くその名が知られていた。



●芝居小屋跡（しばいごやあと）

宮島での芝居興行はすでに16世紀後半から行われていたといわれ、祭礼にあわせて厳島神社周辺の空き地に幕を張り巡らして興行している様子が厳島屏風などに描かれている。こうした仮設の芝居小屋が常設になるのは元禄期からといわれ、御垣ヶ原と呼ばれていた神社裏に芝居小屋が設けられていた。ここでは、大芝居と称した歌舞伎ばかりでなく、曲芸にんぎょうじょうるりや人形浄瑠璃なども演じられ、神社にちなんで「明神座」と呼ばれていた。

また、富座でも興行していたといわれている。

ふれこみ
触込番付

役割番付

近代の史跡

明治維新を迎えると神仏分離の影響を受け、厳島神社境内から本地堂や鐘楼・経蔵などが撤去、また厳島の法会を担っていた供僧寺院が退転を余儀なくされ、さらに晦日山伏や延年などの行事も廃止された。さらに藩から給付されていた経営料も廃止となり、厳島神社では旧来の神職に代わって新たな職制が施行され社務所が設けられるなど、寺社ともに独自に存続の道を模索しなければならなくなった。

しかし、日本三景の一つ、景勝地として広く知られていた厳島は、明治7（1874）年には厳島神社周辺が厳島公園になり、その後順次公園の整備が進むなど、近代の観光地としての新たな道を見つけることとなった。近世に担っていた広島周辺に移入する物資の中継港としての役割は、宇品港の整備により喪失するものの、瀬戸内海の定期航路の開設や鉄道の整備が進むにつれ、厳島港は専ら観光客を迎える機能を発揮するようになった。

明治22（1889）年の市町村制の施行では、厳島町として町制が施行された。日清戦争では広島市で臨時国会が開催され、宇品港から大陸に向け多数の将兵が出兵していった。厳島神社では戦勝祈願が行われ、帰還兵たちがしゃもじを故郷に持って帰ったことなどから広く知られるようになり、参詣客に好評を博する土産物の生産と販売、とくに杓子や茶道具など木工品の製造販売が島の産業の一つとなっていった。

また、広島湾の入口に位置する厳島は、軍事都市広島と呉に通じる海峡防衛のため要基地帯に組み込まれ、鷹ノ巣砲台や室浜砲台が設けられた。砲台は大正期に廃止されるものの、包ヶ浦は軍事施設として昭和20（1945）年まで一般人の立入りは禁止されていた。

一方、厳島神社の社殿や寺社に伝えられていた由緒ある宝物類は、国宝保存法が施行されると特別保護建造物、国宝となり、保存のための措置がとられるようになり、社殿の解体修理が施され、創建時の姿に再現されていった。

また、開墾等により大きく地形を変えていない島は、我が国の初の自然保護法ともいべき天然記念物保存法が施行されると、全島が史跡・名勝に指定され、

厳島神社背後の弥山は原生林の特徴が注目され、天然記念物「彌山原始林」に指定された。こうして自然と文化財の宝庫として、島自体が法律によりその改変が規制されるようになり、また多くの人たちが自然と文化を堪能することができる島として価値を高めていった。

そして、平成8（1996）年には世界文化遺産「厳島神社」として登録され、人類の文化遺産として後世に継承すべきものとされた。

●陸軍省碑（りくぐんしょうひ）

新町の北端の道路沿いに「陸軍省」と刻まれた石柱がある。この道は杉之浦を経て包ヶ浦に通じており、明治30年代に鷹ノ巣砲台を築造するために造られ、この石柱は旧陸軍の管理する道であることを示していた。この道は「陸軍道路」とも呼ばれている。



陸軍省碑

●鷹ノ巣高砲台跡（たかのすこうほうだいあと）



鷹ノ巣高砲台跡

厳島の最東端鷹ノ巣浦と大奈佐美島との間約1kmの厳島海峡は、広島・呉に入港する大型船舶の航路となっており、この海峡から進入する艦艇を防ぐために、鷹ノ巣山の山稜部に設けられた砲台の跡である。ここには28cm榴弾砲6門が設置され、2門の砲座を一組としそれを囲んで播鉢状の土盛りがあり、周囲には石造

の砲側庫や地下式の弾廠がある。

砲座の東部の尾根筋には低砲台に通じる通路があり、途中に砲兵司令所・観測所・通信所などの跡がある。高砲台は明治31(1898)年起工し、明治34(1901)年に榴弾砲が設置され、射撃演習が行われたが、大正15(1926)年に廃止され、広島兵器支廠用地となった。

高砲台の北側の斜面はそのまま包ヶ浦に通じ、包ヶ浦には弾薬本庫や係船場が設けられ、日露戦争時にはここに戦利品が陸揚げされ、昭和20(1945)年まで重要な軍事施設として一般の立入りは禁止されていた。

●鷹ノ巣低砲台跡（たかのすていほうだいあと）

高砲台とともに厳島海峡を防御するために鷹巣浦に設けられた。明治30(1897)年起工し、砲座は海岸の斜面に設けられ、9cm速射砲6門が設置された。砲座や弾廠のほか近くには海上を照らす電灯所や電気を供給する発電所も作られていた。高砲台同様大正15(1926)年廃止となった。砂浜がなくなったために石垣などが崩壊している。

この砲台設置のためここに祀られていた鷹巣浦神社は現在の入浜に移転した。

●室浜砲台跡（むろはまほうだいあと）

室浜砲台は明治31(1898)年に設置され、9cm速射カノン砲が配備されていた。砲台は海岸から約50m内陸にあり、砲を設置するためのコンクリート・石造の砲座と、その周囲の盛り土内にレンガ・石造りの弾薬庫があった。その奥には兵舎なども設置されていた。砲台跡地は、その全貌は分かりにくくなっているが、現在でも跡地の西側部分には砲座、弾薬庫、貯水設備の一部、橋脚の一部が残っている。これらは非常に精度の高い石組みで造ら



室浜砲台跡

れ、砲座の周囲の壁や弾薬庫の外壁・橋脚は、長い間森林に覆われていたにもかかわらず損壊もあまり目立っていない。このようなことから当時の技術レベルの高さを垣間見ることができる。

これらの砲台は大正15(1926)年廃止され、用地は内務省に移管され、昭和38(1963)年、広島大学大学院理学研究科附属宮島自然植物実験所の所管となった。

●宮島ホテル跡

現在の国民宿舎「杜の宿」が建っている所には、以前宮島ホテルがあった。このホテルは広島市の原爆ドーム(かつての広島産業奨励館)を設計したチェコの建築家、ヤン・レツルが設計し、大正6(1917)年に落成。宮島観光を楽しむ外国人専用のホテルとして利用されていた。昭和20(1945)年以後は連合国軍に接收され、保養施設となり、昭和27(1952)年に焼失した。



宮島ホテル

●紅葉谷川の庭園砂防

紅葉谷川は豪雨になると、そのやさしい流れを一変させる。昭和20(1945)年9月の枕崎台風の豪雨では多量の土砂と巨石を押し流し、その後3ケ年を要した復旧では風致に配慮した庭園砂防の護岸工事が行われた。改修工事では周辺の景観に調和する工法がとられ、この庭園砂防工法は世界的にも注目されている。



紅葉谷川の庭園砂防

厳島神社南側の御手洗川の側に高さ2mの巨石があり、枕崎台風による土石流により流れ出たことを記した銘板が付けられている。(枕崎台風襲来碑)

コラム

全国の巖島神社【京都御苑内】

安芸の巖島神社は日本全国に本・境内社を合わせて1400社以上、本社のみで600社以上ある巖島神社の総本社です。全国にある巖島神社のひとつをご紹介します。

京都市上京区

●巖島神社（京都市上京区京都御苑6番地）

御祭神（主神） いちしまひめのみこと 市杵島姫命・たごりひめのみこと 田心姫命・たぎつひめのみこと 湍津姫命・ぎおんによぎよ 祇園女御

京都御苑の南西、九條邸庭園跡にある拾翠池（勾玉池・九条池）の中の島に「弁天さん」を奉った巖島神社があります。平清盛が安芸の巖島大神を崇拝するあまり、清盛の母祇園女御のために兵庫の築島（神戸市兵庫区永沢町）に勧請して祀ったのが始まりです。その後兵庫の築島にあった社を九條家の邸宅内に遷座し、九條家の鎮守社となりましたが、詳しい年代などは不明です。この神社には平清盛の母祇園女御も合祀されています。

本殿前にある鳥居は、2本の柱の上に架かる島木と笠木がからほふ唐破風の形をしていることから「唐破風鳥居」と呼ばれ、大変珍しいものです。唐破風は中央部分を弓形に盛り上げ、左右になだらかなに流れる曲線をもった破風（屋根の切妻部分に付いている装飾板の事）のことです。

この鳥居は北野天満宮摂社伴氏社の中山鳥居と蚕ノ社の三柱鳥居とともに「京都三珍鳥居」のひとつに数えられていて、重要美術品に指定されています。巖島神社の周辺には、たくさんのさるすべり百日紅が植えられていて、夏になると勾玉池のほとりは紅色の花で覆われます。例祭は6月15日、秋祭は11月15日に行われ、家業繁栄・家内安全を護る神として深く信仰されています。

